

北九州市立大学
文学部紀要

第89号

Adventures of Huckleberry Finn における奴隷への視座
—白人と奴隷の死との関係を巡って

前田 讓 治 ……………35

北九州市立大学文学部
比較文化学科
2019

JOURNAL
OF
THE FACULTY OF HUMANITIES
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU
No. 89 March 2019

Mark Twain's Viewpoint on Slaves in *Adventures of Huckleberry Finn*
Johji MAEDA35

The Department of Comparative Culture
The Faculty of Humanities
The University of Kitakyushu
2019

Adventures of Huckleberry Finn における奴隷への視座

—白人と奴隷の死との関係を巡って

前田 譲治

序

Adventures of Huckleberry Finn (1885) は北部を目指す逃亡奴隷 Jim と、彼の逃亡を支援する Huckleberry Finn の描写が作品の大半を占めている。また、道中にハックは、多数の奴隷とも接触する。ここで現実の南北戦争前の旧南部の Missouri 州に目を向けると、8 家族中 7 家族は奴隷を所有した経験が皆無であった (Greene 29)。ところが、本作で家庭内の状況が具体的に描かれている 5 家族の内、Miss Watson、Grangerford 家、Wilks 家、Phelps 家が奴隷を所有している。唯一、Judith Loftus の家庭のみが奴隷を所有していない。また、本作は、およそ 1835 年から 1845 年の旧南部を舞台としている。作品が背景としている時期と重なる 1840 年の記録を参照すると、ハックと Mark Twain の故郷が位置するミズーリ州において、奴隷の割合は総人口の 15.2% に過ぎなかった (Greene 27)。一方、主人公ハックに次いで描写の紙数が費やされている登場人物は奴隷ジムであり、さらに、4 家庭の奴隷の描写が多数登場しており、奴隷の描写に割かれた紙数の割合は先に紹介した奴隷の人口比の数値を明らかに上回る。そうであるならば、旧南部の実際よりも、作中の奴隷の存在感は拡大されている。さらにハックが、奴隷制遵守が絶対的善であるとの作品終末まで存続する確信 (292) と、ジムの逃亡を援助すべきという個人的感覚との間で引き裂かれ、ジレンマに陥る様子も繰り返し描かれている。

以上の点から、奴隷関連の描写を作品の極めて重要な構成要素として作者が認識しているのは間違いない。その結果、奴隷描写に焦点を当てた先行研究は無数に存在している。しかしながら、作者の自伝中の情報以外の歴史的現実と対置させることによって、作中の奴隷描写の分析を行った論考は、*Black, White & Huckleberry Finn* (1999) や *Satire or Evasion?* (1992) に所収の諸論考など、ごく少数に留まる。この点を踏まえ、本稿では、先行研究において筆者が未見である、奴隷と白人の各々と、死との関係が作中でどのように設定されているかに焦点を当てつつ、奴隷描写の特質を考察したい。換言すれば、奴隷と白人の各々に賦与されている生死に係る宿命の本質を考察する。この作業により、本作において白人と奴隷との間に設けられている弁別性の特質を明らかにする。次いで、以上の考察で明らかとなる、作品全体が醸成している奴隷に係る世界観を、南部の歴史的現実と比較検討する。以上を通して、本作で展開している、奴隷に対するトウエインの視座の本質を明確化したい。

I 他者の生死の決定力

まず、Dauphin（白人）が行った詐欺に起因するリンチが彼に対して画策された際に、熟睡中の彼を奴隷が起床させ、リンチについて警告している点に注目したい¹。この奴隷の行動ゆえに王様は辛くもリンチを逃れている（138）。王様は奴隷からの警告の後、即座に逃走したにもかかわらず、追手は王様の近辺に迫っていた（137）。つまり、奴隷による警告がなければ、熟睡していた王様は間違いなく殺害されていた。以上に見られる、奴隷が白人の生死を完全に決定する在り方が、ジムと Tom Sawyer の間でも成立している。

フェルプス農場でトムは銃撃で重傷を負い、ジムと共に川辺に残される。ハックが往診を依頼した医師の到着時には、白人の目を忍ぶ必要がある逃亡奴隷ジムは森に姿を隠し、トムは独りの状態にある。医師は診察時のトムの容態に関して、“... I see I couldn't cut the bullet out without some help, and he [Tom] warn't in no condition for me to leave, to go and get help; and he got a little worse and a little worse ... and I see I couldn't do anything at all with him ...” (288). と述べている。このようにトムは、移動と放置が共に不可能なほどの重傷を負っており、しかも移動前に不可欠な銃弾の摘出手術には補助者が必須であった。その結果、医者はトムを救命する技能を有しながら、補助者不在の状態ではトムの救命ができない。このように無力化した医師が補助者の必要性を独白した所、隠れていたジムが姿を現す決断を行い補助者の役割を果たす。その結果、医師はトムの手術と、その後の移動が可能となる。つまり、手術の補助者としてのジムの登場が、トムの延命の決定的要因となっている。以上の通り、王様と同様に、トムの生死も奴隷の判断と行動によって完全に左右されている。

本場面で注目すべきは、手術が補助者不在では不可能で、しかも、補助者は医療従事者でなくとも務まるという極めて特殊な状況設定だ。加えて、医師に往診を依頼したハックは、医師にトムの負傷に関して伝えた後に長時間熟睡し、トムが残された場所に戻ることを意図しながらも、意に反して戻れなくなる（282）。この不本意なハックの熟睡ゆえに、医師から診察を受ける際のトムは、フェルプス農場の場面で唯一例外的に、ハックが近辺に長期間不在となる。（医師によるトムの診察の前後以外は、ハックは例外なくトムの近辺に位置している。）このように、白人の生死の帰趨を左右する奴隷という本場面の構図は、複数の特殊な状況設定の精妙な組み合わせの上に成立しており、その構築の背後には作者の作為性を指摘できる。ゆえに、この構図は明らかに意識的に生成されているが、この点は、以下の通り、同一構図の反復が為されている事実から、さらに明確化する。

所有者から逃亡した直後のジムは、無人島でハックと偶然遭遇する。この場面でジムはハック

¹ 白人ではなく奴隷が王様を積極的にリンチから救う理由に関しては他所で考察した。詳細は Maeda を参照のこと (“Slavery” 32)。

に対して“‘[E]n ’bout eight er nine every skift dat went ’long wuz talkin’ ’bout how yo’ pap come over to de town en say you’s killed. . . . [S]o by de talk I got to know all ’bout de killin’” (55). と語っている。この発言の通り、所有者から夜更けに逃亡した後に廃屋に隠れていたジムは、逃亡の翌朝から日暮れにかけて、その廃屋の近辺の通行人の会話を盗み聞きし、ハックの殺害（実際は人々の事実誤認）の全貌を把握する。その詳細をジムはハックに語っていないが、ロフタス夫人がハックに伝えている。彼女によると、ハック殺害が行われた翌日、Pap Finn が殺人犯と看做され、リンチにかけられる寸前であった (68)。これこそが、廃屋での盗み聞きによりジムが得た情報だ。しかしながら、ジムが所有者から逃亡した時点がハックの失踪時期とほぼ重なっており、この偶然の符号ゆえに、夜前（ほぼ同時期にジムは廃屋を離れておりハック殺害に関する情報を収集できなくなっている）に人々は、ハックの殺害はジムによってなされたとの誤認に遷移する。ただし、この村人たちの誤認の推移は、ハックとジムが出会って数日後にハックが町の様子を探りに出た際に、ロフタス夫人からの情報によって初めて判明している。さらにこの情報をハックはジムに伝えていない。従って、廃屋の中で収集した日暮れまでの情報しか知り得ないジムは、廃屋を離れた後に、彼自身がハック殺しの真犯人と誤認されている事実を把握できる立場にない。とすれば、卓越した思考力と知力を有するジムが (Cox 175, Robinson, “Characterization” 215, David Smith 105)、彼の逃亡の密告を白人に行う可能性があるハック²を口封じのために殺害しても、彼がハック殺害の罪に問われないと判断するのは自然な流れである。従って、頑強な肉体を有し筋力でハックを圧倒するジムが、特段の選択によってハックの生存を許しているとの解釈 (Beaver 177) は妥当性を持つ。やはり、白人の生死を決定する奴隷という構図を作者は案出している。

同一構図の偏在性に注意しつつ作品を読み進めると、詐欺師 2 人（王様と Duke）によって Silas Phelps に売却され捕縛された逃亡奴隷ジムは、詐欺師の過去の悪行を即座にサイラスに密告する。ジムの密告が発端となって流布された情報の結果、詐欺師 2 人はリンチにかけられている。一方、彼らはリンチを回避する術に長けているため (137-38, 167-68, 171-72)、ジムの密告がなければ、リンチを逃れた可能性が極めて高い。このようにジムは、情報伝達を手段として、彼を捕縛状態に陥れた詐欺師の生命を剥奪する復讐を実現している。以上の通り、白人の生死を能動的に左右する奴隷という構図に揺るぎは見られない。次に視点を変え、白人が他者の生死の帰趨にどのような影響力を行使しうるのかを以下に考察し、白人と奴隷の弁別性を明確化したい。

ジムの密告によって詐欺師がリンチにかけられる危機に瀕していることをハックは知るや、可及

² ハックは、ジムが逃亡している事実を知った際に、ジムの逃亡に関して白人に伝えない不作為によって、自己が“a low down Abolitionist”に墮し、“despise”される対象になると、ジムに明言している (55)。つまり、逃亡奴隷の放置がハックの本意に完全に背く行為である事実を、ジムはハックと出会った直後に把握できている。

的速やかに、彼らの救出に全力を尽くす³。しかしながら、ハックの最大限の努力にもかかわらず、詐欺師の所へのハックの到着時にはリンチがすでに進行しており、彼らの救命に失敗している。このような、ハックの無力性との関連で他場面に着目すると、二つの名家が戦っている戦場に赴いたハックは安全確保のために木の上に退避する。偶然、その木の下に戦闘中の親友 Buck（名家の一員）がやってくる。バックは、遠望が利くハックに“*He told me to watch out sharp and let him know when the men [enemies] come in sight again . . .*” (133). と依頼する。しかし、ハックはバックとの会話に没頭し、背後からの敵の接近を見落とし、それが災いしてバックは敵に殺害される。ハックは常に親切だったバックの死を痛切に悲嘆しており (134)、バックに対する救命意欲は極めて強固であったにもかかわらず、本場面でも救命に際して無力化している。このような在り方（負傷したトムを単独では救命できない既出の医師も該当）は他にもある。

ハックは Mary Jane Wilks に、遺産相続人を名乗る 2 人が詐欺師である真実を告げたため、その事実はいずれ周知となる。その際には、詐欺師の従者としての役柄を強いられているハックは生命の危機に曝される。この点を懸念するハックは、彼が命の危機に瀕した際の救命をメアリーに依頼する。これに対してメアリーは、“*Stand by you, indeed I will. They shan't touch a hair of your head!*” (200) と述べ、ハックの保護を確約する。しかし、真正の遺産相続人が登場した後、相続人の真贋の判断材料がある墓地へと連行される際のハックは、“*. . . 'stead of being fixed so I could . . . have Mary Jane at my back to save me and set me free when the close-fit come, here was nothing in the world betwixt me and sudden death . . .*” (213). という心境を吐露している。このように彼はメアリーからの庇護を全く受けられず、落命寸前に至っている。なぜなら、メアリーはハックが事前に行った指示に忠実に従って他所を訪問しており、ハックの危機を知る由もないからだ。このように、ハック自身が与えた指示ゆえに、メアリーは意に反してハックを危機的状況に放置する結果となる。ただ、拘束されていたハックは、人々が棺桶を開いた際に、棺桶内に放置されていた金貨に注意を奪われたため、拘束が解け逃走が可能となる。このように、ハックを救命するのは彼への強固な保護意欲を有するメアリーではなく、偶然なのだ。

他方、ハックがメアリーに行った助命に関する依頼は、指定された時間に自宅の窓辺に蠟燭を灯すことだ。ハックは危機に陥った場合、蠟燭の炎を手掛かりにしてメアリーに助命を依頼せんとしている。しかしながら、ハックの危難がメアリーの自宅近辺で生じる確証は全くないため、この依頼はハックの助命に関して実効性を有さない。しかしながら、メアリーが灯す炎は、ハックの脳裡においてはハックへのメアリーの救命意欲の象徴となっている。なぜなら、窓に蠟燭の炎が灯っていないことに気付いたハックは非常に落胆し、灯った瞬間に一転して歓喜しているからだ。そのよ

³ ハックの詐欺師に対する極めて積極的な救命意欲の本質に関しては他所で議論した。詳細に関しては Maeda を参照のこと (“Huck” 7-11)。

うな、実効性が希薄な救命行動ですらメアリーが実行に移すのは、ハックが危機を完全に脱して時間が経過した後なのだ。以上のように、白人が他の白人の生命の帰趨を左右できない図式が執拗に反復されている。この構図との対照によって、先に確認できた、白人の生死を能動的に支配する奴隷という構図が、より鮮明化する。しかも、この構図には変種も存在している。この事実を以下に確認したい。

II 偶発的に白人の生死を左右する奴隷

ハックは、自分が殺害されたとの事実誤認を人々に喚起する物理的状況を入念に作り上げ、父親の元から逃走する。ハックの意匠通りに、翌日人々はハックが何者かに殺害されたと誤認し、さらに、ハックと同居し虐待していた父親を犯人と早合点し、即座に父親をリンチにかけようとする(68)。ところが、その日の夜前に、ハックが殺害されたと推測される時間帯とほぼ同時期にジムが失踪していた事実が判明したため、ハック殺しの真犯人はジムであるとの判断に人々は遷移する(68)。その結果、当初ハック殺しの犯人と認識され、リンチにかけられる寸前だった父親は、村に戻った際にリンチを免れている。仮に、ハックの殺害(事実誤認)が周知となった後、あるいは、ハックの生存が確認されている時点においてジムが逃亡していれば、父親は自身がリンチの対象になっているとの自覚が皆無であったため(68)、リンチは不可避であった。つまり、奴隷の行動が偶然の産物ではあるが、白人の生死を左右している。この在り方の類似形が他にも存在する。

グレンジャーフォード家に寄宿するハックは、一家の娘 Miss Sophia から教会に忘れてきた聖書の回収を依頼される。即座にハックは依頼の不自然さを認識し、他意を疑う。それゆえ、教会に放置されている聖書を見つけるやハックは精査し、時間が記載されたメモが挟まれている不審な点に気付く。ハックが聖書を家に持ち帰った際のソフィアは、聖書の到着を待ちわびており、聖書の受領を家族に見られないように警戒して部屋の扉を閉め、メモを見た際には感情が劇的に高揚し、感極まってハックを抱擁している。作品の書き手ハックが叙述の対象として選択した、以上の在り方全てが、当初から彼が抱いていたソフィアの依頼に係る疑念を増幅させるものだ。事実、ソフィアの部屋から退出後のハックは、“studying over this thing”(130)と、彼女の他意について思案を巡らせている。ところが、思索に耽っている最中のハックに奴隷 Jack が話しかけ、ジムが身を潜めている所へと誘導する(131)。離別したジムの現況はハックにとっての重大関心事であるため、ジムとの再会を境にハックの関心はソフィアからジムへと一気に遷移し、ソフィア他意に関するハックの思考は完全に途絶する。

その後、ソフィアが受け取った紙片に記された情報(2人の集合時間)に基づいて実行された彼女と Harney Shepherdson の駆け落ちが原因となり、長年敵対関係にあった、2人が所属する両家の間で全面戦争が勃発する。その戦いにおける親友バックスの戦死を目撃した後のハックは、“... I

reckoned I was to blame, somehow. . . . I judged I ought to told her [Sophia's] father about that paper and the curious way she acted, and then maybe he would a locked her up and this awful mess wouldn't ever happened” (134). と述べ、自責の念と痛切な悔悟の情を表白している。

ここで、聖書をハックから受け取った際に、紙片の記載内容を読んだか否かと、文字を読めるか否かの2点をハックに問うたソフィアに対して、彼は記載内容を読んでおらず、印刷文字以外は読めないと、嘘を慎重に連ねていた点に注意したい。このように、ソフィアの言動に不審を抱き、その真意を詮索しているハックの現状を彼女に気取られないよう、彼は予防線を張っている。つまり、彼女がハックの詮索姿勢を把握し、ハックへの情報漏洩を念頭に置いての防備的措置に出る可能性を彼は排除せんとしている。このようにハックは、ソフィアの不審な行動に関して、何らかの対処を以降に行うことを想定して発言している。だからこそ、先の引用 (134) の通り、その後両家の全面戦争が生じバックが戦死したことに対して、ハックは部外者であるにもかかわらず、自責の念を痛切に覚えているのだ。このように、ソフィアの行動の不審な点について、ハックが彼女の父親に詳細を伝える可能性は少なからず存在していた。

しかもハックは、ハーニーがバックの銃撃を免れたことを知った際のソフィアの表情の激変を注視し、ソフィアがハーニーに特段の感情を抱いている事実を把握している (127)。加えてハックは、聖書に挟まれたメモ書きを見た際に彼女の表情に読み取れた感情の激変が (130)、以前に注目したソフィアの表情の激変 (127) と類似している事実も把握している。つまり、ソフィアの真意を紐解く重要な鍵となる複数の情報をハックは確保している。そのハックは “a capacity of understanding which is far richer in insight than Tom's” (Chadwick-Joshua 119) を有し、聡明さの点でトムを圧倒している。実際にハックは、ボートの船長 (84-85)、slave-hunters (112-13)、詐欺師 (195-97) らの心理を瞬時にして洞察し、虚偽情報の提供を通して意図した通りに彼らの行動を操っている。さらには、人々の現実認識の様態を予見した上で、計算通りに村人全員を事実誤認に導いている (49-50)。このようにハックは、人間の心理への洞察力が超人的に卓越している。この聡明さを以て、すでに把握している、ソフィアに関する不可思議な諸状況をハックが分析していれば、ソフィアに関して父親に報告する決断を下した可能性が高かったはずだ。そうしていれば2人の駆け落ちを阻止でき、両家の多数が落命する大規模な戦闘も回避できた。ところが、この可能性を消滅させたのが、先に確認した通り、ソフィアの不審な諸行動を反芻しているハックに話しかけ、ハックの分析的思考を途絶させた奴隷ジャックなのだ。そうであるならば、ジムの場合と同じく、白人を全く念頭に置かずに奴隷が行った行動が、偶然の連鎖の結果、白人の生死を決定的に左右している。さらには、白人が他の白人の生死を能動的に左右できない図式の再来も見られる。

ジムがハックの行動を密かに支配している点に関しては、すでに複数の論者が言及している (Beaver 177, Robinson, “Characterization” 211)。しかし、白人への支配力を行使するのはジムに留ま

らない。他の複数の奴隷も、白人の生死の帰趨という重大な局面を左右していた。奴隷のこの影響力の前では、白人は受動的立場に立つしかない。以上に確証できた奴隷の対白人の優位性は、別形態でも作品に沈潜している。この事実を以下に確認することにより、作品の基幹構造を明示したい。

Ⅲ 暴力による死との距離

本節では白人と奴隷の各々が、暴力死との間に保持する距離の差異について考察する。詐欺師2人は、死去した Peter Wilks の兄弟と詐称し、ピーターの遺産の詐取を目論む。その後、真正の遺産相続人が登場するが、彼らは荷物の誤配のために真正の相続人である事実を証明できない。そこで彼らは、兄弟しか知り得ぬ、故人の入墨に関する詳細を伝えることにより真正さを証明しようとするが、彼らの情報が誤っているとの証言が葬儀担当者よりなされる。詐欺師に正しい情報を伝えられるはずもなく、真正の相続人と詐欺師を共々リンチにしようとの提案がなされ、それに皆は賛同する。その結果、詐欺師のみならず、危険を冒してまで遺産相続人の利益を守ろうとしたハック(190-92)、さらには真正の遺産相続人までもが、暴力死寸前に至る(212)。しかし、その直後に墓場に埋葬された死体の入墨の確認を行うべきとの提案がなされ、賛同者が多く生じたために、真贋を問わない無差別的なリンチは実行には至らない。彼らは一男性の発言によって、辛くも暴力死を免れている。

その後、墓場で故人の入墨を確認するために棺桶を開いた際に、遺体と共に隠されていた金貨に人々の注意が奪われたため拘束が解け、詐欺師とハックは共に逃亡に成功する。ピーターの遺体の入墨の実体が確認されれば、真正の遺産相続人の証言が正しく、従って、ハックに従者の役割を強いている2人が詐欺師である事実が判明し、ハックはリンチにかけられていた。そのため、金貨の突然の出現により拘束が一時的に解けたハックには逃走以外の選択肢があり得ず、詐欺師2人も同様に逃走している。しかし、詐欺師とハックが安全を確保した時点で、ハックは詐欺師の安否を気遣うことなく逃走したことを王様から非難され、殺意を伴った暴力を振るわれる(216)。しかし公爵が、王様の暴力の不条理性を指摘できるだけの冷静さを保っていたため、ハックは辛くも救われる。

以上の通り、ウイルクス家の場面において再三暴力死寸前に至るハックと詐欺師とは対照的に、ジムは青の塗料を顔面に塗布され、病気のアラビア人との虚偽の警告文も近辺に掲示され(171)、その結果、他者から忌避され暴力の対象とはなり得ない。詐欺師は当初からジムの売却による金銭獲得を狙い、ジムに白人の手が全く及ばないように工夫している。以上の通り、暴力死に関して、奴隷は白人よりも圧倒的に安全な立場を享受している。

次に、グレンジャーフォード家に寄宿しているハックが、名家の子弟バックと森に出向いた場面

に注目したい。そこでバックは敵対している名家の男性を狙撃する。敵方は即座に反撃姿勢を見せたため、ハックは逃走するが、その際に、“to dodge the bullet” (127) と銃撃の回避を念頭に置いている。このように、ハックは部外者であるにもかかわらず、敵方から銃撃される危険に曝されている。その後ある朝、バックが戦闘に出向いたことを知ったハックは、親切だったバックを気遣って危険な戦場へ赴く。戦場に到着したハックは、木の上と薪の山の陰のどちらに身を潜めるべきか逡巡する。最終的にハックは、確たる根拠もなく木の上を選択する (132)。その後、薪の山の裏手には戦闘中のバックが逃れてきて、そこで敵方から射殺される。ハックが薪の裏手に隠れていれば、敵方からは彼が名家の部外者だとは判別できないため、バック共々射殺された可能性が極めて高い。

このようにハックは、グレンジャーフォード家の場面でも暴力死の危険性と複数回直面している。さらに、戦闘に直接関わらないグレンジャーフォード家の女性ですら、親戚からの援軍を招集するため、敵方の名家が臨戦態勢を整えている中、屋外に出て危険に身を曝している。このように、グレンジャーフォード家内の白人は全員が暴力死の可能性と直面している。他方、奴隷は“‘I reck’n dey’s gwyne to be mighty rough times’” (132). との発言の通り、傍観者として安全な屋内に留まり、暴力死の危険性から完全に隔離されている。この点は、ハックが名家に寄宿している間、絶対に人目につかない森の中に身を隠し続けている逃亡奴隷ジムに関しても同様である。

他の場面に目を移すと、Colonel Sherburn は、周囲の人々から寄せられた暗黙の期待感に押される形で Boggs を殺害している (Carrington 73, Robinson, *In* 121)。周囲の人々はシャーバンにボグズ殺害を促しながら、それが実行されるや、殺害を口実としてシャーバンを一致してリンチにかけようとする。しかし、シャーバンは話術に長けていたため、多数の群衆の総意に基づいたものであるにもかかわらず、リンチを回避できている (162)。さらに、シャーバンのリンチを見物するために彼の自宅に殺到した群衆も、シャーバンから撃鉄を起こした銃を向けられている (162)。他方、奴隷とリンチに向かう人々は塀によって隔てられ、別空間に存在する (161)。このように、白人とは異なって、奴隷が暴力死から隔絶される在り方が偏在している。この偏在性は、父親とジムの関係を分析することにより、さらに確証される。

ハックの親権の件で父親と関与した判事は、教化による父親の不品行の矯正が不可能と悟るや、父への猟銃の使用を主張する (35)。この発言は、町の人々を通してハックの耳に入るほど流布しており、私的所感に留まってははいない。つまり、法秩序を司る人物が、父親への超法規的な致命的暴力の行使を公に主張している。その後、アルコール依存症の父親は錯乱状態に陥り、ハックを刺殺寸前に至る。その父親が寝入ると、ハックは弾丸の装填を慎重に確認した上で、父親に銃を向けている (42)。このようにハックは、自分の殺害を再度父親が試みた場合は、躊躇なく彼を射殺しようとしている。さらに、自分が殺害されたとの誤解を誘発する物理的状況を構築した上でハックが逃

亡した際に、人々は父親をハック殺しの容疑者と誤認し、即座にリンチにかけようとする (68)。その後、父親は、“mighty hard looking strangers” (68) に銃殺されている。このように、父親は恒常的に暴力死と隣接している。

以上の父親の状況とジムの状況を比較すると、ジムはハックが行方不明になったと考えられる時期に偶然逃亡したため、父親同様にハック殺しの被疑者となる。実際に、もう1人の被疑者、父親には200ドルの賞金がかけられた一方で、ジムには300ドルの賞金がかけられている (68)。賞金の多寡は、父親以上にジムがハック殺しを疑われている事実を物語る。既出の通り、人々は父親をリンチにかける寸前に至っており、当然ジムは父親以上にリンチの対象となって然るべきである。しかも、ウルクス家の場面において人々は、詐称と真正の相続人を共に無差別的にリンチにかけようとしており (212)、無辜の人物を含めた被疑者全員の処刑を、南部リンチの特質として作品は提示している。さらに、現実の旧南部では殺人で告発された奴隷が群衆によって超法規的なリンチに処せられる例が頻発している (Stampp 190-91)。加えて、ジムの所有者ワトソン嬢は、ジムの家族の離散を前提とする奴隷売買を、Widow Douglas の反対を黙殺して進めている (55)。ウルクス家近隣の人々が、奴隷売却の結果の家族の離散に一致して憐憫の情を示していた点を視野に入れると (195)、ワトソン嬢の奴隷への感性は並外れて冷酷と評価できる。さらに、ハックはワトソン嬢の妹、ダグラス未亡人の命の恩人である。その結果ハックはダグラス未亡人宅に引き取られ、そこでワトソン嬢と同居し彼女の教育を受けている。このように、ワトソン嬢はハックと緊密な関係にある。以上の在り方を勘案すれば、ワトソン嬢がハック殺しの被疑者ジムのリンチに肯定的態度を示した点は推測に難くない。ところが、以上の諸状況が前提としてありながら、ジムへのリンチが企図されたとする情報は一切、登場しない。この設定は必然性を欠き、その背後には作者の作為性を指摘できよう。しかし、その結果、白人以上に暴力死から隔絶された奴隷という図式が堅持されている。

今度はフェルプス農場におけるジムに注目したい。逃亡中のジムは詐欺師によって逃亡奴隷としてサイラスに売却され捕縛される。現実における奴隷の逃亡は、南部の重要な社会制度の根幹を揺るがす由々しき所業であった (Goldin 4, E. Smith 102)。旧南部の規範に照らせば、究極の大罪をジムは犯したにもかかわらず、サイラスに十分な食料と嗜好品を与えられ厚遇されている (255-56)。また、トムは、ジムを縛り首にすべきとの発言をジムの面前で行うが (245)、これは、トムとジムとが見知らぬ者同士であるという虚偽の設定を、その場に居合わせたフェルプス農場の奴隷に納得させるための方策である。トムは、ジムがワトソン嬢の遺言によって自由黒人となっている現状を把握しており、先の発言は実体が皆無である。

その後、トムの手引きによって逃走したジムは再捕縛され、大勢の隣人によってフェルプス農場に連れ戻される。フェルプス農場近辺は通常は無人数状態であるため (228)、その隣人たちは、ジム

の強奪予告に備えてフェルプス農場に前々日夜に参集していた武装農民で、逃亡したジムを農場近辺で探していたと考えられる。彼らは、トムがフェルプス農場に送りつけた警告文（捏造）の内容を真実と捉えている。そのため彼らは、ジムが“*a desprate gang of cutthroats*” (274) と共に行動していると思込んでいる。そのような危険人物と結託しているジムの追跡する際に、彼らは当然銃で武装しているはずだ。しかしながらジムの連行して来た彼ら（ジムへの処罰感情に強く支配されている）が銃を所持している旨の記述は絶無である。その結果、銃の致命的暴力にジムが直面する状況が回避されている。しかし、ジムは2度逃亡を図っており、加えて、トムが捏造した警告文ゆえに叛乱を企てている奴隷の一味と誤認されている (Mensch 77)。これらを問題視し、農民の中にはジムの処刑を主張する者も当然いる。しかし一方で、ジムの殺害が所有者からの賠償金請求に帰結する可能性を冷静に指摘する声が挙がる。その結果、現実の旧南部においては、奴隷の反乱が生じる可能性を白人は過度に危惧していたにもかかわらず (Greene 38-39)、ジムは致命的暴力の対象とはならず、“*a cuff or two*” を受けるに留まる (288)。この致死性から程遠い暴力こそが、重罪を反復した奴隷への処罰であり、また、本作に登場する唯一の対奴隷暴力である。

ジムは逃亡を図ったため以前より劣悪な環境での捕縛を強いられるが、間もなく、ワトソン嬢の遺言によって奴隷から解放され自由黒人となっていた事実が判明する。この遺言の結果、逃亡という、旧南部社会への重篤な反逆 (Goldin 4, E. Smith 102) をジムは2度も犯しながら、処罰（旧南部の現実にあっては苛烈な暴力によるもの）を完全に免れる。ここで、ジムの所有者ワトソン嬢がジムの家族の離散を全く顧慮せず、ダグラス未亡人の反対も黙殺して、強引にジムの売却を進めていた点を想起したい。他方、家族を離散させる形での王様による奴隷売却に、近隣の人々は奴隷への同情ゆえに一致して猛反対していた。この描写は、利潤追求よりも奴隷の家族の維持を優先すべきという発想を、旧南部人の一般的感性として位置付けている。このような世界観においては、ワトソン嬢の対奴隷姿勢こそが異端である。さらに、彼女の異端性を作中で唯一共有するのが王様なのだ。その王様の内面性は、“*the most distressing examples of human depravity*” (Nichols 211)、あるいは、“*The black-hearted*” (Wieck 114) と評されている。このような非人間性をワトソン嬢は王様と共有している可能性が強い。加えてジムは、妹の命の恩人ハックを殺害した容疑者である。以上の状況にもかかわらず、ワトソン嬢は遺言でジムに最大限の人的配慮を示している。当然ながら、ワトソン嬢の遺言の不自然さを複数の論者が一致して指摘している (Leonard 196, Lester 203, MacCann 150, Mensch 69)。従って、逃亡を2度も企てたジムが暴力的処罰を完全に免れる帰結は、牽強付会としか判断できない。このように、暴力死との間に、ジムが距離を維持し続ける在り方の背後には、確固たる作者の作為性が潜在している⁴。

⁴ この場面には、奴隷ほどには他者の生死を左右できない白人という、I節で確認した構図の再来を確認できる。

他方、トムはジム救出の準備の際に、彼の学術的趣味に則り、ジムの足の切断を一時的に想定する (247)。しかしながら、この場面の前後において白人が同等の負傷を負う状況は想定されておらず、ジムのみが差別的に致命的暴力 (想定) との直面を強いられていると映る。しかし、作品冒頭に登場する、盗賊団を模倣するトムたちの遊びにおいて、参加メンバーが規則を破った際には、喉を切り裂かれ、死体を焼却され、当該メンバーの家族も殺害される処罰をトムは想定している (20-21)。つまり、実行に移される可能性が皆無のトムの想念に限定しても、白人は奴隷以上に暴力死と近接している。

加えてトムは、ジム救出の決行前に匿名文書をサイラスに送り、ジムの強奪計画の存在を警告し、その計画に関与している人物たち (トムとハック) の殺害を奨励している (274)。トムは自らの暴力死の可能性を高める挙に出ている。さらに、ジムの強奪を阻止すべく多数の武装農民が警戒している中、ジムの救出に際して、トムは終始、意図的に独り緩慢な逃走を行う。その上、トムは不用意に物音を立て武装農民の一斉射撃を誘発し、緩慢な逃走が祟って重傷を負う。その際、トムは銃弾の命中を、“the gladdest of all” (279) と受け止めている。ジム救出の準備の際に一貫してトムは、古典文学における様々な状況の再現を目指しているが、銃弾による負傷や死亡はその目的と合致しない。このように、他者の暴力による自己の肉体の重篤な棄損をトムは追い求め続けている。以上の通り、白人と暴力死とが、奴隷の場合よりも圧倒的に近接する構図に揺らぎはない。その結果、生命の存続性に関しても、奴隷の白人に対する優位性が確立している。この指摘との関連で、今度は奴隷と白人と、傷病死との距離に注目したい。

IV 傷病死との距離

まず、フェルプス家の Aunt Sally がハックに語る、蒸気船の爆発事故で負傷し、その後死亡した人物 (白人) に関する回想に注目したい。その人物は負傷が瘻に悪化し、切断手術の後に、“turned blue all over” (230)、“a sight to look at” (230) という状態で凄惨な死を迎えている。この昔話は、ハックが蒸気船の事故を到着遅れの虚偽の理由として偶々用いた結果、連想によって誘発されている。つまり、サリーの回想は偶然の産物といえ、登場する必然性が極めて希薄である。さらに、ハックも彼女の回顧に完全に無反応で、昔話はハックへの対話形式を取りながら、実質的にはサリーの独白となっている。しかも、サリーが話題にする物故者は、夫サイラスの知人が懇意にしていたに過ぎない、サリーにとって面識が無い遠方の人物で、ストーリー展開への関与も絶無である。従って、彼女の回想が伝える情報の有意性は極めて低い。しかし、そのような瑣末の情報であるにもかかわらず、サリーの回想は詳述されている。ここには、情報の重要度と、情報の供給量との間に明瞭な不均衡が存在する。そのような不均衡を敢えて導入してまで、作者は、事故死の究極的凄惨さを詳述し、印象的に提示している。つまり、事故死の印象的提示の導入は作者の明確な意

匠に基づいていると考えられる。次に、同様の意図が事故死描写全体を統括している事実を確認したい。

まず、墜落事故による白人の死体は、“just a kind of a layer”、“[T]hey slid him [corpse] edgeways between two barn doors . . .” (65). と描写されている。ただし、この叙述は父親からのハックの伝聞に基づいている。従って、引用が現実を正確に再現しているか否かは不明で、父親による誇張が加わっている可能性がある。しかしながら、そのような真偽不詳の情報が伝えるのは、原型を留めないほどに激しく変形した事故死体の、やはり凄惨極まりない様態である。

さらに、raft-episode に登場する事故死の背景に注目すると、父親に絞殺された赤子が詰められた樽が3年間、父親が乗船した筏に付きまとっている。しかも、樽は夜にのみ姿を見せ一定地点に停留し、必ず嵐を引き起した後、夜明け前には姿を消す。筏乗り2名が落雷死するのは、この不可思議な活動を示す樽の祟りの結果なのだ (105-6)。怪異性が極めて強い上記の情報は筏の乗組員の回想形式で伝えられ、やはり彼による誇張や脚色の可能性を否定できない。しかし、彼の語りによって、2名の事故死は極度に奇怪な超常現象として位置付けられている。

別場面に注目すると、物故者 Emmeline Grangerford は生前、近隣に死者が出る度に即座に死者を悼む詩を創作した上で、その家に駆けつけていた (122-24)。そのような彼女の死者への追悼手法は、“glossily inappropriate for expressions of woe with any real substance”、あるいは、“more than ineptitude” (Blair 230) と評されるほど常軌を逸している。彼女の “fascination with death” (Rasmussen 181) という感性と併せて、彼女の人物像の特異性が際立たされている。さらに、そのエメリンが詠んだ追悼詩の一作品全体がハックによって紹介されている。その結果、子供の溺死の詳細が、“grotesquely sentimental” (Sloane 74) と評され、しかも “the ‘pure’ humor typical of the Southwest” (Carter 337) という場違いな要素を包含した詩によって伝えられている。既出の、作詩者の人物像の異様性とも相まって、この溺死の叙述には奇矯性が幾重にも重奏的に付加されている。

以上の議論との関連で、エメリンが詩で詠んだ溺死体と筏乗りの落雷死の瞬間の様子には挿画が付されている (105, 123) 点に注意すべきだ。なぜなら、本作の挿画の基調は “funny” であり、叙述された事象を “comical” に提示する機能を有しているからだ (David 268)。また、挿画は、トウエインの意向を正確に反映するように、作者自身によって時間をかけ精査と編集がなされている (David 248-49)。つまり、トウエインの明確な意匠に基づき、挿画を通して事故死2件に場違いな諧謔性が付与されている。このように、2件の事故死描写は視覚情報を通して奇異性が増幅されている。以上に確認した通り、白人の事故死描写は例外なく印象的に映るよう慎重に構成されており、作者が意識的に統一性を生成しているのは間違いない。その統一性は、事故死する白人の有様を読者の脳裡に鮮明に刻印し、事故死と白人との近接性を読者に印象付けることになるだろう。

一方、奴隷ジムも事故で負傷する。まずジムはハックの悪戯ゆえに毒蛇に噛まれ、“His foot

swelled up pretty big, and so did his leg . . .” (64). という重篤な状況に陥る。逃亡奴隷であるため、投薬等の治療が受けられないジムに可能な処置は、ウイスキーの摂取と迷信に根ざす呪いのみである。しかしながら、“[B]y and by the drunk begun to come, and so I judged he was all right. . . . Then the swelling was all gone and he was around again” (64). と、ウイスキーの摂取によって症状が改善した印象を与える叙述をハックは展開し、その後ジムは快癒する。次いで、筏が蒸気船と衝突した際にもジムは負傷する。負傷直後に関してジムは、“couldn’t swim fas’” (131) と説明しており軽傷とは言い難い。しかも逃亡奴隷ジムは、白人から目撃されてはならないため負傷への処置は限定される。それにもかかわらず、ハックと再会したジムは快癒している。処置に手を尽くしても悲惨な事故死を迎える白人と、処置なしで負傷から容易に回復する奴隷とが対照的に描き分けられている。

上記の対照性を踏まえて、シャーバン大佐のリンチを目指す白人群衆の狂騒状態に注目すると、“[E]verything had to clear the way or get run over and tromped to mush, and it was awful to see” (161). と描写されている。このように、リンチに向かう群衆は重篤な事故に遭う危険に曝されている。他方、同一場面の奴隷は、“[T]here was nigger boys in every tree, and bucks and wenches looking over every fence; and as soon as the mob would get nearly to them they would break and skaddle back out of reach” (161). と描写される。つまり、事故の危険に曝される白人男性と、その危険性から隔離された奴隷とが、極めて対照的に提示されている。この在り方の類例がフェルプス農場の場面にも認められる。

フェルプス農場でのジムの救出前に、トムは術学的性向ゆえに、実用の点で完全に無益な苦役をジムに強制し続ける。この過程においてジムが被った肉体的苦役を全て列挙すると、まず、ジムに与えられるパンにトムが金属片を含ませたため、“[I]t most mashed all his teeth out . . .” (256). という状況にジムは陥る。ジムは、小屋に持ち込まれた鼠や蜘蛛に噛まれている (271)。さらに、トムから要求された諸行動の結果、“[W]e was all pretty much fagged out, too, but mainly Jim” (271). とジムは疲労困憊し、この点は医師からも強調されている (289)。これらの状況から、トムのジムに対する姿勢は“complacent and ruthlessly sustained sadism” (Beaver 105) と評されるが、トムの自分自身への処遇を視野に入れた際に、どのような位置付けができるであろうか。

ジム救出の下準備を行うトムは、“get us all killed” (242)、 “most busted his [Tom’s] brains out” (244)、 “got burnt pretty much all over . . . and eyes put out with the smoke” (262)、 “near mashing us” (266)、 “a most amazing stomach-ache” (271)、 “going to die” (271) といった描写の通り、事故死を招きかねない危険な作業を嬉々として継続している。つまり、本場面でトムの masochism はジムへの sadism を過激度の点で完全に圧倒している。(ハックは不承不承、トムの意向に従って作業を行っている。) 作業の様子を一例、具体的に見ると、巨大砥石の運搬を最初ハックとトムで行った際、2人は “near mashing us” (266) と事故死寸前に至る。ところが、その後、ジムとハックが同一

作業を行うと打って変わって、“walked her [grindstone] along like nothing” (266) と円滑に完遂される。このように、事故死の可能性と直面するのはトムの masochism の下で作業を行う白人のみで、やはり、奴隷はそれを完全に免れている。

次いで白人の病死描写に注目すると、葬儀屋よりも先に物故者の元に駆けつけることに執着していたエメリンは、詩作の韻の案出に手間取り、葬儀屋よりも到着が初めて遅れてしまう。この遅延を境に彼女には“warn’t ever the same”という変化が生じ、“pined away”となり、“did not live long” (124) という結末を迎える。このように、ハックの伝聞の形で伝えられる彼女の病死の顛末も究極的に奇妙である。また、エメリンの近隣の死者に対する追悼活動の描写に、“Every time a man died, or a woman died, or a child died . . .” (124). という叙述が含まれるため、白人の傷病死者が間断なく生じているイメージも生成されている。さらに、ハックはピーターの病死体に触れる機会があり、その際の“so cold” (192) という触感が具体的に叙述されている。以上の通り、病死する白人の有様も、死因、頻度、感触の側面から、やはり読者の記憶に残り易い印象的な提示がなされ、病死と白人との近接性のイメージも生成されている。

他方、作中で唯一健康体でなく、死との距離が最も近い奴隷は“a sick nigger” (146) である。その奴隷は、“sunning himself in a back yard” (146) と、肉体労働から解放され養生を許されている。病状の詳細は定かではないが、快癒に向けての環境を享受できている。無名の端役で、描写が些少であるにもかかわらず、病身の奴隷に関しては病死との距離が最大限に保たれ、やはり、白人との対照性が認められる。傷病死に注目しても、生命の存続性の点で奴隷が白人に優位を占める図式が認められる。

以上の通り、他者の生殺与奪に関与できる潜在力の点と、生命力の持続力、継続力の点での、白人に対する奴隷の二重の優越性が作中で密かに醸成されている。換言すれば、生命力の横溢のイメージが奴隷に付与され、逆に、生命力の枯渇・減退のイメージが白人に割り振られる構図が成立している。次いで、以上の基幹構造が有する意義を、旧南部の現実の諸状況を視野に入れつつ考究したい。

V 旧南部の現実

奴隷制が存在した旧南部諸州の公的法規に関して、“Slavery exerted a profound influence on capital punishment in the South, with southern states creating slave codes that specified numerous capital offenses applying to slaves and free blacks but not to whites” (Vandiver 34). との観察がある。つまり公的法規は、奴隷と自由黒人を、白人以上に容易に死刑に処せる環境を整備していた。具体例を挙げると、1804年のミズーリ州の法典において、白人は犯意が存在した時のみ死刑判決を下されたのに対して、奴隷は犯意の有無にかかわらず、行動の結果のみによっても死刑判決を下された (Trexler 71)。

また、白人に対する奴隷の暴力行為に対して、司法が死刑判決を下すことも可能であった (Stamp 210)。さらに、奴隷は懲役や罰金刑にはなじまないため、司法が下す死刑以外の処罰も、肉体の切断や焼印など肉体を棄損させる傾向が強かった (Johnson, “Punishments” 604)。焼印の使用や体の切断は 19 世紀半ばまでは奴隷への一般的処罰として採用され、その後漸減するが消滅には至らなかった (Stamp 188, 210)。このように、公的処罰は、奴隷を白人以上に死に近接させた。

公的法規の他に、奴隷所有者が奴隷に対して私的に定めた規則もあり、これに反した奴隷にも処罰が加えられたが、極端な例に至っては奴隷の身体を解体するなど、その暴力性は司法による公的処罰より苛烈で、かつ行使される頻度もより高かった (Johnson, “Punishments” 604)。私的処罰に関しては、“Most of this violence took the form of corporal punishment designed to keep slaves subordinate. . . . Slaves were routinely whipped, beaten, raped, tortured, and killed to preserve slavery and white racial supremacy” (McNair 165, 169). という同様の見解もある。奴隷の処刑は、他の奴隷に対する教育的効果が高いと所有者は判断していたのだ (Genovese 65)。また、新聞広告に記載された、逃亡奴隷の外的特徴には、銃撃による傷、焼印、鞭打ちによる傷、切断された耳の形状などが見られ (Gara 277-78)、奴隷への私的処罰の暴虐性が分る。

所有者の対奴隷暴力の苛烈さは、“Cruelty of masters and overseers ranked high among the reasons for running away” (Campbell 651). との分析の通り、奴隷の所有者からの逃亡の主因であった。同様の見解は他にもある (Stamp 113)。しかも、逃亡後に捕獲された奴隷に対する処罰も “severe” であり (Campbell 652, Stamp 171)、“hell” (Dempsey 170) に例えられるものであった。具体的には、常習的に逃亡する奴隷は足を切断された (Johnson, “Punishments” 604)。つまり、所有者の暴虐性からの逃避の試みは、さらに過酷な懲罰を招く可能性を孕んでいた。

そもそも、暴力不在では旧南部の奴隷制を機能させることは不可能で、奴隷制と暴力とは不可分の関係にあったとの見解で論者は一致している (Beckert 240, Dempsey 90, McNair 167, Nisbett 58-59, Oakes, *Slavery* 7, Stamp 171)。例えば、奴隷による “Poor work” ですら、鞭打ちの対象となった (Genovese 65)。その結果、ほぼ全員の奴隷所有者が鞭打ちを行い、鞭打ちを免れた奴隷はほぼ皆無であった (Johnson, “Whipping” 812, Kolchin 121, Stamp 174)。このように日常的に行使された鞭打ちが奴隷を死に至らしめた場合も多く (Fogel 144, Genovese 65)、処罰は常に残虐行為に発展する可能性を孕んでいた (Stamp 178)。以上の通り、奴隷は所有者からの処罰による死の危機とも日常的に直面していた。この現実には以下の通り、奴隷の子にとっても無縁ではなかった。

まず、奴隷の親は、白人の “abuse” から我が子を保護することに全霊を傾けた (Blassingame 186, King 70)。実際に奴隷の子は、“brutal treatment from their little white playmates” や “flogged” といった処遇を多く受けている (Blassingame 185)。加えて西部の奴隷州の所有者には奴隷の子供同士を格闘させ、それを娯楽として楽しむ者もいた (Forret 157)。このように、幼少の奴隷ですら苛烈な暴

力に曝されていた。さらに、地域の秩序を維持するために結成された slave patrols は “erratic acts of violence against defenseless slaves” (Kolchin 122) や “arbitrary or excessive beating” (Genovese 618) を対奴隷に行使し、所有者以外の白人から致命的暴力を受ける危険性にも奴隷は直面していた。他方、奴隷は財として貴重なため、暴徒集団によって殺害されることは稀で、白人よりも暴徒に殺害される可能性は低かったとの分析もある (Cash 113)。しかし奴隷は、白人が絶対に対象となりえない多様な暴力との近接を強いられており、暴力死の可能性は圧倒的に白人よりも高かったと判断できる。

さらに、自殺は奴隷が所有者に対して行い得た抵抗の一形態であった (Foner 135, Mensh 83, Silkenat 182, Stamp 128)。具体的には、奴隷売買の結果、子供と離散することが決まったミズーリ州の奴隷の母親が斧で子の手を切断した後に自殺した例や、子供3人と共に井戸で投身自殺した例 (Foner 56) などがある。加えて、病気と奴隷の関係について、“In addition, a variety of ailments resulted from the slaves’ poor diet, inadequate clothing and shelter, and miserable working conditions” (Oakes, *Ruling* 110)。という観察がある。その上、奴隷は肉体を棄損される処罰を多く受けたが、懲役刑を科されたとしても、奴隷が収監される牢獄は不衛生極まりなく、猛烈な寒気と暑気に曝され、非常に劣悪な環境であった (Johnson, “Punishments” 604)。このように、奴隷は白人以上に、病死とも近接していた。

他方、旧南部の白人の大半が医者の治療を受けた経験がない一方で、奴隷は、白人よりも手厚い治療を受けられた (Kolchin 114, Scarborough 490-1)。これは、奴隷の健康状態に配慮を行った所有者が医者による治療を奴隷に受けさせたからだ (Fogel 120)。さらに、奴隷のための医療に所有者は積極的に出費を行った (Genovese 62)。しかしながら、奴隷の治療に当たった医師は無知、無能で、多くの医師が奴隷を治療の実験材料として利用した (Genovese 226)。実際に、医師による処置は奴隷の病状を悪化させる結果を頻繁に招いている (Fogel 120-21, Savitt 313)。

以上に確認できた奴隷の生活環境の結果、当然ながら、奴隷の死亡率は白人よりも高かった (Engerman 184, Oakes, *Ruling* 111)。本作が背景としている時代 (1835年から1845年頃) に近い1850年時点の記録を参照すると、奴隷の平均寿命は白人よりも12%低かった (Fogel 126)。しかも、奴隷の死亡は白人の場合ほどは厳密に記録されなかったため、実際は国勢調査で得られた数値以上に奴隷と白人の平均寿命の格差は大きかった (Stamp 318)。さらに、1850年の奴隷の幼児の死亡率は、白人の幼児の場合の2.2倍に上った (Schermerhorn 94)。このように高率だった幼児死亡率を算入すると奴隷と白人の死亡率の格差はさらに拡大した (Stamp 319-20)。母親の栄養摂取不足と重労働に起因する赤子の低体重が、乳児の高死亡率の要因であった (King 60)。また、奴隷の幼児における窒息死率の高さも際立ち、1850年の統計によると、幼児の死亡における窒息死の割合は、白人の場合は1.2%だったのに対して、奴隷の場合には9.3%にも上った (Fogel 124)。奴隷の幼児

の窒息死の頻発の理由は、奴隷の親が子の死を苦役からの解放と眺める、以下に概観されている傾向から推察できる⁵。

Death spared children from the harsh realities of slavery their parents faced. If some parents felt a sense of relief when their offspring died, it is reasonable to think that it was because they did not joyfully welcome children into a life of bondage, knowing the hardships they were likely to face.
(King 62)

以上の通り、旧南部の奴隷は生を受けた直後から白人に生殺権を絶対的に掌握され、白人には無縁の多種多様な死との近接性を運命付けられていた。

視点を変えて、旧南部における自由黒人（最終場面のジムが該当）と暴力死との関係に目を向けると、奴隷よりも遙かにリンチの対象となり易かった (Dale Smith 138)。また、奴隷制廃止後のミズーリ州では、当地から去らない場合は殺害するとの脅迫が自由黒人になされ、かつ実行されている (Dale Smith 170)。さらに、奴隷制廃止後の 1882 年から 1889 年（本作が出版された 1885 年近辺）の記録を参照しても、南部で起きたリンチの 72% は白人によって自由黒人を対象にして行われ、その一方で、白人が白人を対象として行った割合は 16% に留まった (Hill 30)。他方、1860 年のミズーリ州において、人口比で黒人奴隷の割合は 9.7% に過ぎず (Greene 27)、1880 年代も当然、黒人は少数派であったはずだ。つまり、奴隷解放後の自由黒人が南部においてリンチで落命する危険性も、白人より圧倒的に高かった。

以上に確認できた、旧南部の奴隷の現実に関して、トウエインがどの程度把握していたかは、彼の伝記的記述から判明する。例えば、行動が不格好だという些細な理由により白人が奴隷を殺害する現場をトウエインは 10 才時に故郷で目撃している (Dempsey 88)。さらに彼は少年時代に故郷で、逃亡奴隷の切断死体を遊んでいる最中に目撃している (Fishkin 21-22)。4 才時の彼は、近隣で殴打されている逃亡奴隷の悲鳴を自宅の寝台で耳にした経験もある (Pettit 15)。他にも彼は、父親が些細な理由で奴隷を鞭打ちや殴打する現場を何度も目撃し (Levy 22)、奴隷に対する懲罰として、家族を離散させる形での奴隷売却を父親が実行したことも把握している (Levy 22)。家族の離散ゆえの悲嘆は奴隷の自害の主因であり (Mensch 83)、父親の懲罰は奴隷の生命の剥奪に連なる可能性を孕んでいた。

以上の、奴隷に関するトウエインの見聞との絡みで、未完に終わった本作の続編 “Tom Sawyer’s

⁵ 既出の通り、本作には親による乳児の絞殺が描かれている (106)。それは、しかしながら、白人 Dick Allbright によってなされている。この形でも、奴隷と白人の各々の現実が作中では反転させられた形で提示されている。

Conspiracy”を眺めると、この作品には“a truer picture of the conditions of slaves in Missouri” (Loving 17) が提示されている。具体的には、奴隷解放後のジムが冤罪でリンチにかけられる寸前に至っており、“[B]lack lynchings in the South were mounting” (Loving 17). という、作品執筆時の南部の自由黒人の危機を作者が把握していた点が読み取れる。本作は作者が62才の1897年にスイスで執筆されている (Rasmussen 476)。南部で生育したトウェインは1871年以降、主にアメリカ北部に定住し、1891年以降は主にヨーロッパに居住している (Rasmussen xv-xxi)。北部定住後の1871年から作品執筆時の1897年の間に、トウェインは南部には5回、短時間立ち寄ったのみである (Rasmussen xviii-xix)。つまり、「トム・ソーヤーの陰謀」執筆時の作者が、奴隷解放後の南部の自由黒人が直面した危機を直接見聞する機会は極めて限定されていた。それにもかかわらず、「トム・ソーヤーの陰謀」は奴隷解放後の自由黒人の危機を視野に入れつつ執筆がなされていた。ここからは、奴隷解放後の黒人の実情に、南部を離れた後もトウェインは特段の注意を払っていた事実が判明する。つまり、奴隷であれ自由黒人であれ、死との近接を白人によって強いられる南部黒人の現実を、トウェインは南部在住の幼年時から南部を離れた老年時に至るまで把握している。

ところが、すでに判明した通り、直接的に描かれているストーリーの背後で、作品を潜在的に統轄しているのは白人と死の近接性と、それとは対照的な、奴隷の死からの隔絶という図式であった。あるいは、奴隷が白人の生死の帰趨に関して決定力を発揮し、白人を受動的状況に追い込むとは対照的に、白人の救命と奴隷の殺害に関して白人が無力化する構図だ。以上の、奴隷が白人に優位を占め続ける在り方は、作者自身が知悉している旧南部の現実を完全に反転させている。

そもそも、本作では南部黒人の生活環境の実情の提示が巧妙に回避されている。例示すると、自由黒人となったジムは、“In fact, because of the Fugitive Slave Act of 1850, all the powers of government . . . were ranged against Jim’s survival as a free man, even in a ‘free’ state” (Barksdale 51). という環境に置かれる。しかしながら、彼が自由黒人となった直後に作品が終了するため、“presumably lives happily ever after” (Loving 17) という、現実離れした印象がジムの未来に付随する。また、捕縛後の逃亡奴隷ジムに皆が加えるであろうとハックが想定する罰、“[E]verybody naturally despises an ungrateful nigger, and they’d make Jim feel it all the time . . .” (221). も微温的で、既出の南部の現実 (Johnson, “Punishments” 604) から大きく乖離している。さらに、ハックの筏での逃亡奴隷の隠匿を疑い筏の検分を主張する slave-hunters は、筏にいる父が天然痘に罹患しているとのハックによる示唆 (虚偽) を真に受け、筏の検分を放棄し虚偽情報によって喚起された同情心からハックに40ドルを譲渡する。この彼らの行動に対しては、“moral credit” に値するとの評価が下されている (Cox 177)。その上、ハックは受け取った40ドルの半分の20ドルをジムに与えたため、slave-hunters は知らずしてジムの逃亡を利している⁶。また、slave-hunters は5名の逃亡奴隷を追跡している最中であつたが、この追跡劇の結末も描写されていない。他方、現実の slave-hunters は、逃亡

奴隷の捕縛の他に、逃亡への警告を企図して射殺も行っている (Dempsey 170)。一方、逃亡奴隷も逃亡の障害となる人物と対峙した際には、彼らの殺害を試みている (Osofsky 29, Stamp 129)。このような、slave-hunters と逃亡奴隷との間に現実には存在した殺意の衝突を糊塗する状況が幾重にも描き込まれている。以上のような、奴隷が置かれた現実の提示の回避に留まらず、実情を完全に反転させた在り方を底流として作中に忍ばせている点にこそ、本作の作品構造の統一性を認めるのである。

結語

本作においては、奴隷を暴力死させる可能性がある白人が、ハックの父、ロフタス夫人の夫と彼の知人、slave-hunters、フェルプス家の近隣住人と多数登場し、奴隷に対する生殺与奪権を白人が掌握していた旧南部の現実が再現されている印象を受ける。さらに、ジムとグレンジャーフォード家、ウィルクス家、フェルプス農場の各奴隷は白人の命令への盲従を絶対的に強いられている。特に、フェルプス農場におけるジムとトムの関係は、この主従関係の絶対性を際立たせる。しかし、そのような明示的な上下関係とは裏腹に、人間にとっての普遍的な関心事である死との距離に関して、奴隷と白人の現実の在り方を反転させた潜在的基調の生成に作者は腐心している。その結果、表面描写の背後に、相反する基調の深層描写が潜在する、いわば二層構造を作品は採用している。その深層基調は、作中に散在している情報を俯瞰しつつ精査するのが常態ではない一般読者によって即座に認識されるのが極めて困難である。つまり、この二重構造を読者が把握することを作者は期待していない。そうであるならば、読者にとって不分明な存在である深層基調は、作者の意識裡においてのみ有意性を持つことを前提とした、作者の私的領域とも解釈できる。

その私的領域の意義を解き明かすためにトウェインの自伝に注目すると、故郷 Hannibal の奴隷の処遇に関して彼は、“mild” (39)、あるいは、“Cruelties were very rare and exceedingly and wholesomely unpopular” (39). と述懐している (Twain, *Autobiography*)。しかしながら、これらの記述の直後には、奴隷が些細な違反が原因で白人によって殺害されるも、殺害された奴隷に皆は無関心で、奴隷という財産を失った所有者にのみ強い同情が寄せられた事実を述懐している (40)。さらに彼は、奴隷への処遇を “brutal” と評している (Pettit 14)。他にも、奴隷に対する肉体的な虐待をトウェインが目撃した事実を著作に複数述懐している (Levy 22)。すなわち、彼が自伝で行った、旧南部の奴隷の生活の快適さの指摘に対する反証を自身の手によって列挙している。このような、自伝的記述に見られる撞着性から分る通り、作者は、事実の歪曲であると読者が容易に看破できる形

⁶ ジムとハックが乗った筏が蒸気船と衝突して破損した後に、衝突事故によって紛失した、筏の航行の際の必需品をジムは数多く買い揃えている (131)。このような多額の出費が逃亡奴隷に可能となったのは、slave-hunters からハック経由でジムが入手した 20 ドルゆえであると推測できる。

ですら、著述において奴隷への処遇を美化している。このように、自伝的記述においては、奴隷にとっての過酷な現実を伝えようとする作者と、その現実の直視が不可能な作者とが併存している。

以上に確認できた、自伝的記述においては露出している、奴隷生活の現実を歪曲した美化が、本作では、二重構造の深層に位置する、奴隷に係る現実の反転的描写として展開しているのだ。すでに確認した通り、奴隷生活の現実を反転させつつ提示するのが主務の深層は、読者に存在を認識される可能性が低い。つまり、自伝的記述においては、奴隷への処遇の美化と直視の併存の形で見られた撞着性の露見が、本作においては、美化姿勢を作品の深層に沈潜させることにより、回避されている。この回避を実現するための方策という点にこそ、本作の二重構造の精髓が存するのである。

Works Cited

- Barksdale, Richard K. "History, Slavery, and Thematic Irony in *Huckleberry Finn*." Leonard 49-55.
- Beaver, Harold. *Huckleberry Finn*. London: Allen & Unwin, 1987.
- Beckert, Sven. *Empire of Cotton: A Global History*. New York: Vintage, 2014.
- Blair, Walter. *Mark Twain & Huck Finn*. Berkeley: U of California P, 1973.
- Blassingame, John W. *The Slave Community: Plantation Life in the Antebellum South*. New York: OUP, 1979.
- Campbell, Stanley W. "Runaway Slaves." Miller and Smith 649-52.
- Carrington, George C., Jr. *The Dramatic Unity of Huckleberry Finn*. Columbus: Ohio State UP, 1976.
- Carter, Everett. "The Grangerfords." *The Mark Twain Encyclopedia*. Eds. J. R. LeMaster and James Wilson. New York: Garland, 1993. 336-37.
- Cash, W. J. *The Mind of the South*. 1941. New York: Vintage, 1991.
- Chadwick-Joshua, Jocelyn. *The Jim Dilemma: Reading Race in Huckleberry Finn*. Jackson: UP of Mississippi, 1998.
- Champion, Laurie, ed. *The Critical Response to Mark Twain's Huckleberry Finn*. Westport: Greenwood, 1991.
- Cox, James M. "A Hard Book to Take." Champion 171-86.
- David, Beverly R. "The Pictorial *Huck Finn*: Mark Twain and His Illustrator, E.W. Kemble." *Huck Finn among the Critics: A Centennial Selection 1884-1984*. Ed. M. Thomas Inge. Washington, D.C.: United States Information Agency, 1984. 247-69.
- Dempsey, Terrell. *Searching for Jim: Slavery in Sam Clemens's World*. Columbia: U of Missouri P, 2003.
- Engerman, Stanley L. "Demography." Miller and Smith 182-86.
- Fishkin, Shelley Fisher. *Lightning Out for the Territory: Reflections on Mark Twain and American Culture*. New York: OUP, 1997.
- Fogel, Robert William, and Stanley L. Engerman. *Time on the Cross: The Economics of American Negro Slavery*. 1974.

Adventures of Huckleberry Finn における奴隷への視座
—白人と奴隷の死との関係を巡って

- New York: Norton, 1989.
- Foner, Philip S. *History of Black Americans: From the Emergence of the Cotton Kingdom to the Eve of the Compromise of 1850*. Westport: Greenwood, 1983.
- Forret, Jeff. "Violence within Slave Culture." Wood 157-61.
- Gara, Larry. "Fugitive Slaves." Miller and Smith 276-81.
- Genovese, Eugene. *Roll, Jordan, Roll: The World the Slaves Made*. New York: Vintage, 1976.
- Goldin, Claudia. *Urban Slavery in the American South 1820-1860: A Quantitative History*. Chicago: U of Chicago P, 1976.
- Greene, Lorenzo J., et al. *Missouri's Black Heritage*. Columbia: U of Missouri P, 1993.
- Hill, Karlos K. *Beyond the Rope: The Impact of Lynching on Black Culture and Memory*. Cambridge: Cambridge UP, 2016.
- Johnson, Whittington B. "Punishments." Miller and Smith 603-5.
- . "Whipping." Miller and Smith 811-13.
- King, Wilma. *Stolen Childhood: Slave Youth in Nineteenth-Century America*. Bloomington: Indiana UP, 2011.
- Kolchin, Peter. *American Slavery*. London: Penguin, 1995.
- Leonard, James S., and Thomas A. Tenney. "Huck Finn in the Twentieth Century." Leonard 195-98.
- , et al, eds. *Satire or Evasion?: Black Perspective on Huckleberry Finn*. Durham: Duke UP, 1992.
- Lester, Julius. "Morality and *Adventures of Huckleberry Finn*." Leonard 199-207.
- Levy, Andrew. *Huck Finn's America: Mark Twain and the Era That Shaped His Masterpiece*. New York: Simon & Schuster, 2015.
- Loving, Jerome. *Mark Twain: The Adventures of Samuel L. Clemens*. Berkeley: U of California P, 2010.
- MacCann, Donnarae. "Minstrel Shackles and Nineteenth-Century 'Liberal'ity in *Huckleberry Finn*." Leonard 141-53.
- Maeda, Johji. "Huck and Slavery: Re-reading the Wilks Episode in *Adventures of Huckleberry Finn*." *Kyushu American Literature* 50 (2009): 1-13.
- . "Slavery, Social Caste, and Character Presentation in *Adventures of Huckleberry Finn*." *Kyushu American Literature* 51 (2010): 25-38.
- McNair, Glenn. "Violence toward Slaves." Wood 165-69.
- Mensh, Elaine, and Harry Mensh. *Black, White & Huckleberry Finn: Re-imagining the American Dream*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1999.
- Miller, Randall, and John Smith, eds. *Dictionary of Afro-American Slavery*. Westport: Greenwood, 1988.
- Nichols, Charles H. "'A True Book—With Some Stretchers': *Huck Finn* Today." Leonard 208-15.
- Nisbett, Richard E., and Dov Cohen. *Culture of Honor: The Psychology of Violence in the South*. Boulder: Westview, 1996.
- Oakes, James. *The Ruling Race: A History of American Slaveholders*. 1982. New York: Norton, 1998.
- . *Slavery and Freedom: An Interpretation of the Old South*. New York: Norton, 1990.

- Osofsky, Gilbert. *Puttin' on Ole Massa: The Slave Narratives of Henry Bibb, William Wells Brown, and Solomon Northup*. New York: Harper & Row, 1969.
- Pettit, Arthur G. *Mark Twain & the South*. Lexington: UP of Kentucky, 1974.
- Rasmussen, R. Kent. *Mark Twain A to Z: The Essential Reference to His Life and Writings*. New York: OUP, 1995.
- Robinson, Forrest. "The Characterization of Jim in *Huckleberry Finn*." *Champion* 207-25.
- . *In Bad Faith: The Dynamics of Deception in Mark Twain's America*. Cambridge: Harvard UP, 1986.
- Savitt, Todd L. "Health Care." *Miller and Smith* 312-17.
- Scarborough, William K. "Slavery in Mississippi." *Miller and Smith* 481-96.
- Schermerhorn, Calvin. *Unrequited Toil: A History of United States Slavery*. Cambridge: Cambridge UP, 2018.
- Silkenat, David. "Suicide." *Wood* 181-85.
- Sloane, David. *Adventures of Huckleberry Finn: American Comic Vision*. Boston: Twayne, 1988.
- Smith, Dale Edwyna. *African American Lives in St. Louis, 1763-1856: Slavery, Freedom and the West*. Jefferson: McFarland & Company, 2017.
- Smith, David L. "Huck, Jim, and American Racial Discourse." *Leonard* 103-20.
- Smith, Elbert. *The Death of Slavery: The United States, 1837-65*. Chicago: U of Chicago P, 1969.
- Stamp, Kenneth. *The Peculiar Institution: Slavery in the Ante-Bellum South*. 1956. New York: Vintage, 1989.
- Trexler, Harrison Anthony. *Slavery in Missouri, 1804-1865*. 1914. London: Forgotten Books, 2015.
- Twain, Mark. *Adventures of Huckleberry Finn*. 1885. New York: Norton, 1999.
- . *The Autobiography of Mark Twain*. Ed. Charles Neider. New York: Perennial, 1990.
- Vandiver, Margaret. "Capital Punishment." *Wood* 34-39.
- Wieck, Carl F. *Refiguring Huckleberry Finn*. Athens: U of Georgia P, 2004.
- Wood, Amy Louise, ed. *Violence*. N. p.: U of North Carolina P, 2011.